

ルカによる福音書11章 29-54 節 「明らかにされるもの」

1A 徴を求める悪い時代 29-36

1B この時代を裁く人々 29-32

2B 明るくされる目 33-36

2A 忌まわしい宗教指導者 37-54

1B 外側を清めるパリサイ人 37-44

2B 重荷を負わせる律法専門家 45-54

本文

ルカによる福音書 11 章を開いてください。私たちは今、イエス様がエルサレムに向かう旅におられる話の中にいることを思い出してください。そして今、イエス様は弟子たちに、エルサレムの死を意識されながら、彼らもまた自分を捨てて、自分の十字架を負い、それでイエスに付いていくことを教えておられます。この前は、天の父にどのように祈るか、その祈り方を教えられ、そして求める者には聖霊の満たしが与えられることを約束してくださいました。

けれども、その聖霊による証しをベルゼブル、悪霊どもの頭、サタンの仕業だとした者たちがいました。さらに、地上で悪霊を追い出しても天からの徴はないのか、とイエスを試す者たちもいました。それでイエスは、答えられました。神の指によって始めて、悪霊どもを追い出しているのだ。ちょうど、パロの魔術師がモーセの行なう奇蹟に対抗できなくなって、「これは神の指」ですと言ったように、疑いのない証拠をもってイエス様が確かに来るべきキリストであることを示す徴を、聖霊によって行われていたのです。それを彼らはサタンのせいにしてしましました。

群衆がたくさん集まってきて、その人気が集まっているようなものだけでも、それとは裏腹に反対の力も強く迫ってきていました。ここに、私たちの戦う、信仰の戦いの姿を見ることができます。神の国が進むことによって、表向きは関心や興味を示す人々が増えるかもしれませんが、その核になる部分を否定する動きも出てきます。29 節に入る前に、27-28 節を見ると、ひとりの女が、あなたを産んだ腹は幸いですと叫びます。これをイエス様は、神のみことばを聞き、それを守る者が幸いです、と一蹴されました。そうですね、主が聖霊によって働いておられるのに、神の御言葉ではないところで、人間的な要素でいろいろと議論しているのです。こうした悪い動機で集まってきた群衆に対して、イエス様が警告されます。

1A 徴を求める悪い時代 29-36

1B この時代を裁く人々 29-32

11:29 さて、群衆の数がふえて来ると、イエスは話し始められた。「この時代は悪い時代です。しるしを求めているが、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられません。11:30 というのは、ヨナ

がニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。11:31 南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、彼らを罪に定めます。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。11:32 ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。

福音書には、「この時代」という言葉をイエス様が使われている場面を多く見ます。それは、主が公の生涯を歩まれ、そしてその世代が存続する四十年ぐらいの期間を指します。神が御子を遣わされることによって、ご自分を証する期間であり、それでもイスラエルが応答しないのであれば、裁かれるという内容です。かつて、イスラエルの民はカデシュ・バルネアまで来てカナン地の地に入ろうとしたので、不信の罪を犯して四十年間、その荒野をさまよわなければいけなくなりましたが、その四十年間と似ています。イスラエルの民は、メシヤを迎え入れて、救われる機会が与えられているのにそれを行わず裁かれたのです。

「しるしを求めている」と言われますが、それは 16 節で「天からのしるしを求める者たちもいた」とあるように、そのような者たちに対する言葉であります。口の利けなかった者が悪霊を追い出されて話せるようになるというのは、あまりにもはっきりとしたメシヤの到来の徴であります。ところが、それを認めないでなお、「この地上で徴を行っているが、天からの徴は見せないのか。」とイエスを試しているのであります。

イエス様に取り上げられたのは、「ヨナの徴」です。マタイによる福音書では、これがイエスが三日目によみがえる徴であることを言及しています。ヨナが魚の中に三日三晩にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいなければいけないということです。けれども、著者ルカはその部分は省略しています。実際に、この場面ではイエス様は語っておられなかった可能性が大きいです。ここで主がお語りになりたかったのは、「あなたがたは、預言者ヨナの言葉を聞いたニネベの人々のように、悔い改めていない。」ということを叱責するためでありました。ですからヨナの時代のことだけでなく、南の女王のことについても語っておられます。ヨナの語ったニネベの人々も、また南の女王もどちらも異邦人です。イスラエルの民は数多く神の言葉を聞き、神が生きておられることを知っていたにも関わらずそれに応答しなかった罪がありますが、異邦人はわずかな知識であっても、その光を見失うことなく応答したということでもあります。

初めに、南の女王について説明しますと、彼女はシェバという、今のイエメンあるいはサウジアラビアでしょうか、アラビア半島の南部にあったところからはるばる、エルサレムのソロモンに謁見に来ました。なぜなら、ソロモンには知恵があることを聞いていたからです。ソロモンの知恵を聞いて、彼女はソロモンの神がおられることを知り、神をほめたたえました。イエス様は、ここにソロモンよりもすぐれた者がいると言われます。ソロモンは神の知恵を証していましたが、イエス・キリ

ストは神の知恵そのものであります。つまり、神を知ろうとするその飢え渴きが彼女にはあったということです。

そしてヨナの時代に戻りますと、アッシリヤの首都ニネベで、ヨナの説教を彼らは聞きました。「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。(ヨナ 3:4)」とだけヨナは言いました。悔い改めなさいという言葉も何もない、あまりにも不親切な、希望のない絶望の言葉です。ところが、ニネベの人たちは、王から一般の民に至るまで、荒布をまとって灰をかぶり、ひたすら神に願って、悪い道を病逆な行ないを悔い改めようとしてしました。すると神は思い直されたのです。いうなれば、レストランの食材の余ったものを捨てようと思ったら、お腹の空いていた人が食べにきたけれども、それがニネベの人たちですが、シェフが時間をかけてこしらえた料理をイスラエルの民は食べもしないで、「もっと良いのはないのか！」と文句を言っているようなものです。

2B 明るくされる目 33-36

ですから、これまで与えられている神の知識、その光に応答しなさいとイエス様は言われています。そこで次に主は次のことを語られます。

11:33 だれも、あかりをつけてから、それを穴倉や、枡の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。はいって来る人々に、その光が見えるためです。11:34 からだのあかりは、あなたの目です。目が健全なら、あなたの全身も明るいですが、しかし、目が悪いと、からだも暗くなります。11:35 だから、あなたのうちの光が、暗やみにならないように、気をつけなさい。11:36 もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、その全身はちょうどあかりが輝いて、あなたを照らすときにように明るく輝きます。」

マタイによる福音書ですと、イエス様が山上で説教をされた時に弟子たちに対して、世界の光になりなさいと命じられた時の喩えでありました。けれどもイエス様は今、ユダヤ人の群衆に対して同じ喩えを使っておられます。ここでは、イエスご自身が燭台の光であられて、それを主が既に彼らに輝かせていました。はっきりと神の本質を彼らに見せておられたのです。それでも彼らが、まるで盲目になっているか、あるいは目隠しでもしているかのように見ていないと責めておられます。

もし目が見えなければ全身も見ることができない、と主は言われます。その通りですね、この体の一部分が不自由になれば、体全体を不自由にさせます。ですから大事なものは、自分が神の真理を見る、信仰の目を持っているかどうかであります。そこで思い出すのは、使徒パウロの祈りです。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。(エペソ 1:17-19)」

イエス様の言葉は、私たちに対する警告でもあります。御言葉を何度となく聞いても、それを拒み続けるのであれば、やがて全身暗くなってしまう時が訪れます。

2A 忌まわしい宗教指導者 37-54

ここまでは、群衆に対するイエス様の言葉でした。けれども、もちろんその中に、パリサイ人や律法学者がいました。今度は、彼らとの間で起こった議論です。

1B 外側を清めるパリサイ人 37-44

11:37 イエスが話し終わられると、ひとりのパリサイ人が、食事をいっしょにしてください、とお願いした。そこでイエスは家にはいって、食卓に着かれた。11:38 そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさらないのを見て、驚いた。11:39 すると、主は言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や大皿の外側はきよめるが、その内側は、強奪と邪悪とでいっぱいです。11:40 愚かな人たち。外側を造られた方は、内側も造られたではありませんか。11:41 とにかく、うちのものを施しに用いなさい。そうすれば、いっさいが、あなたがたにとってきよいものとなります。

パリサイ人に対して、イエスが強い口調でその愚かさを暴いておられます。それは私たちが合同修養会でじっくりと学んだ、山上の垂訓にあった「パリサイ人や律法学者にまさる義」であります。外側の行ないを清めるのではなく、内なる人、すなわちキリストに結ばれている自分が、その心が新しく変えられて、それで外の行ないをすることができるという教えです。今でも、イスラエルに行けば、ホテルの食事の席に手を洗うところがありますが、それは衛生上の理由ではなく儀式上の理由のためです。それによって、自分たちが清められたとしていたのです。

ここでパリサイ人も、そしてイエス様も決して譲ることのできない対決が起こっています。パリサイ人にとっては、手を水に浸すことによって清められるという教えは譲ることができないものでした。けれどもイエス様によっては、どんなことがあってもご自分の福音に他の教えを付け足すことはできませんでした。付け足すものであれば、それは異質な物に代わる、福音を歪めるものになるに他ならなかったのです。今、このパリサイ人はイエスがどうなさるかじっくり見ていたのでしょうか。そして心の中で驚いていました。しかしイエスは、心の中を知っておられますから、それを明るみに出されました。イエスの御言葉は、私たちの外の行ないではなく、その行ないの奥にある心の動きに向けられます。

イエスは、「愚かな人たち。」と言われます。強い言葉ですが、それは、分かり易く話せば悪い言葉が出てくるからといって、その口をゆすいでいるようなものです。悪い言葉は心から出てくるのであり、口をゆすいでも取ることはできないのですから、愚かです。それをイエス様は、今、用意されている食卓を使って、大皿や杯は水の清めを行っているけれども、出てきたその食べ物は強奪と邪悪でいっぱいではないか、と言われていました。食べ物は、宗教の立場を利用して、やもめの家

を食いつぶしている、とイエス様は言われました(マタイ 23:14)。

私たちの信じている福音には、人の思惑によってそれに付け加える動きが必ず出てきます。それを偽りの教えと聖書では呼びます。福音は、私たちが神の裁きに服さなければいけない罪を犯したことを教えます。律法によって、心の中の邪悪さが示され、そして自分がどうしようもない、救いようもない罪人であることを悟るのです。そして、神がその罰をご自身の身に置かれました。ご自身の独り子キリストの上に置かれました。その血によって罪を取り除き、ご自身の御霊によって私たちに新たに生まれさせ、御霊によっても罪を清めてくださるのです。

これに対して、他の事柄をしなければ神の義を達成できないと加えて教える者たちがやって来ます。それとの戦いがあるのです。それが信仰の戦いであり、福音を純粋に保つ戦いです。

11:42 だが、忌まわしいものだ。パリサイ人。あなたがたは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛とはなおざりにしています。これこそ、実行しなければならない事からです。ただし他のほうも、なおざりにしてはいけません。

これから主は、「忌まわしいものだ」と六回、宣言されます。パリサイ派に対しては三回、律法学者に対しても三回宣言されます。ここから私たちも、主の目に何が忌まわしいのか考えていきたいと思えます。一つは、「優先順位」です。十分の一を主に捧げるということは、神からの命令です。それを行なうことは御心になっています。けれども、いかに十分の一を守るか、その外側の行ないに囚われて、その十分の一の元々の目的である、公義や神への愛がなおざりにされていました。

いかがでしょうか、私たちの心はすぐに規則に逸れていきます。礼拝を守るといふこと、その他の集まりに出るといふこと、祈ること、御言葉を読むこと、これらはとても良いことです。むしろしっかり、守らないといけません。けれども、それを守ることが目的となって、その中にある神の義と、神への愛を忘れては元もこうもありません。礼拝、御言葉、祈り、そして献金も、自分の内に何も良い物がない、しかし神はキリストの内にすべて良い物を注いでくださった、この方に預かりたいという強い願いがあって、それで主の前に出ていきます。

私たちは、どちらかの極端に陥ります。規則の中に自分を置くか、それとも自分のしたいことをするようになるか、のどちらかです。十分の一を規則として守るか、それとも十分の一という規則より神の愛が大事なのだと言いながら、自分のしたいこと、自分の持っていたい物、これらを優先していく生活を送ります。この極端のどちらもが、根っこはパリサイ人の教えなのです。福音は、バランスがあります。そのバランスの中にいることは、一番難しいことです。なぜなら、そこに自分を捨てなければいけない落としどころがあり、自分を捨てるからこそキリストが満ちてくださるのです。

11:43 忌まわしいものだ。パリサイ人。あなたがたは、会堂の上席や、市場であいさつされること

が好きです。

二つ目の忌まわしさは、「他者の評判」です。誰が見ていなくても主に対して行なっているところには、品性が育まれます。天なる父に祈り、主に対して善行を行い、また断食をします。けれども、他人に見せるために行なう、つまり人に対して行なう時は評判を気にします。自分がどう思われるのか、この人への恐れはそのままパリサイ派の教えなのです。

11:44 忌まわしいことだ。あなたがたは、人目につかぬ墓のようで、その上を歩く人々も気がつかない。」

三つ目の忌まわしさは、「欺き」です。この言葉はかなり酷いものです。ユダヤ人は、神から死体に触れたら汚れると律法によって教えられていました。それでパリサイ人は、その汚れから離れるために墓に印を付けて、近づかないように気をつけていました。したがって、パリサイ人たちの教えを人々が受けることによって、人々が汚れていきます。律法や規則そのものが、人々を清めるものではありません。あくまでもイエス・キリストの福音のみが、人々を清めるのです。けれども、自分たちはそれによって清められると思っている。それで、汚れがそのまま人々に広がっていくのだということでもあります。

ある方が、「教会が宣べ伝えるべき唯一の福音」という冊子を書いておられます。¹そこに、福音以外の要素を教会が教え始める時に、それは偽りの福音となることを書いています。この社会には、いろいろな必要が出てきて、その必要に答えるべき動くのだが、教会が教会として成り立っているのは唯一、福音なのだという立場です。その価値観とは何かと言いますと、一つは、「成功」があります。教会をあたかも企業のように考えて、成功することが至上の価値観であるかのように語られます。次に、「癒し」というものがありました。精神的な病があまりにも多いこの世の中です。そこで、精神医療や心理学を教会の中にも取り入れる傾向があります。また肉体の癒しもあるでしょう、それは癒しの集会として持たれて、癒されることが目的になってしまいます。そして三つ目に、「政治」があります。社会がどんどんおかしな方向に向かっているので、平和活動などに教会を向かわせるのです。そして四つ目に、「福祉」があります。弱者を助けることが教会の役目であるとして、そうした社会奉仕活動に従事するのです。そして五つ目に、「学校」になってしまいます。礼拝によって神に自分を捧げるのではなく、聖書の言葉が教育機関のように情報を受け取るところと化してしまう、ということです。

これらのことはすべて、良いことです。けれども、外側を清めるだけで内側を清めることはありません。良いことですから、それが御心になっていると自分を欺くのです。

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=5112>

2B 重荷を負わせる律法専門家 45-54

11:45 すると、ある律法の専門家が、答えて言った。「先生。そのようなことを言われることは、私たちをも侮辱することです。」

パリサイ人と分けて、律法の専門家が出てきました。しばしばパリサイ人と律法学者が並べて、書かれていますが、パリサイ人は「敬虔」を求める人々であり、自分たちを律法の遵守によって清く保つ運動が、バビロン捕囚以後のユダヤ教の中で起こってきました。今、その伝統を受け継いでいるのは、超正統派のユダヤ教徒です。けれども、それと律法の学者は違います。エズラが学者でした。律法を教えて、人々にその意味を理解させ、神に導く働きをしていた人々です。けれども、パリサイ派のしていることは彼らの解釈に基づくのですから、このような強い反応が来しました。

11:46 しかし、イエスは言われた。「あなたがた律法の専門家たちも忌まわしいものだ。あなたがたは、人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本もさわろうとはしない。

律法の解釈によって、その教えが細分化していき、人々が到底負いきれないものとなっていました。使徒ペテロが、エルサレムの会議で異邦人に割礼を受けさせるのかどうかという激しい議論で、「私たちの先祖も私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。(使徒 15:10)」と言いました。

ここでの忌まわしさは何か？これは、「重荷のある人の重荷を取るのではなく、さらに重荷を負わせる。」ことであります。イエス様は、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」と言われました。そして、わたしのくびきを負いなさい、それは軽いのだと言われました。主の命令は重荷とはなりません。私たちは、このキリストにあつて人の重荷を互いに負うのです。「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。(ガラテヤ 6:2)」御言葉を教えるということは、その人といっしょに御言葉に取り組むことであります。聞いている人々のために執り成して祈ることであります。それが無い教えは、律法の専門家と同じ忌まわしさを持っています。

11:47 忌まわしいことだ。あなたがたは、預言者たちの墓を建てている。しかし、あなたがたの先祖は預言者たちを殺したのです。11:48 そのようにして、あなたがたは、自分の先祖のしたこと証人となり、それを認めています。なぜなら、あなたがたの先祖が預言者たちを殺し、あなたがたがその墓を建てているからです。

ここでの忌まわしさは、「迫害者になっている」ということです。使徒の働きでステパノが、サンヘドリンにおいて、アブラハムから始まる歴史を語りました。ヨセフの時に、彼が兄たちによって憎まれ、エジプトに奴隷として売られました。モーセの時に、彼はイスラエル人から拒まれて、四十年間、

荒野で羊飼いをしていました。神の預言者たちが、イスラエルの民によって拒まれた歴史を述べていったのです。ですから、律法の専門家は預言者たちの墓を建てているけれども、それは自分たちも預言者たちの血を流した同じ迫害を行っているのだ、ということです。彼らは間もなく、イエスを十字架につけ、そして神の使徒たちを後に迫害する者たちになっていきます。

私たちが、キリスト教会でもこの過ちを犯しています。つまり、聖書を読む時にイスラエルの民の犯した過ちや罪を見る時に、なぜかそれを「自分は犯していない」という前提で読み、以下に彼らが悪いことを行っているのかと責めます。そして、預言者たちなど迫害を受けた者たちを敬います。けれども、実はそのイスラエルの過ちと罪は、私たちがそこに陥らないようにする神の教訓であるにも関わらず、自分自身に当てはめることをせず、他人行儀になっているのです。

違います、パリサイ派や律法学者というのは、「何もしなかったら、普通にしていたら、こうなっているのが人間なのだ」ということであります。自分は正しいところに置くことはいつもするが、罪人や悪者と同じところに座っているのではないか、という自己吟味はしない。自分は語るが、それに関わろうとしない。これは律法学者がしていたことですが、私たちは普通にしていたら全く同じことをしているのです。私たちは、「パリサイ的だ」として他の人を裁きますが、まさにそうすることによって自分自身がパリサイ的になっていることに気づいていません。

11:49 だから、神の知恵もこう言いました。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者を殺し、ある者を迫害する。11:50 世の初めから流されたすべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。11:51 それは、アベルの血から、祭壇と神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、(V.50 挿入) そうだ。わたしは言う。この時代はその責任を問われる。』

神の知恵だとして、引用してお語りになっているのですが、これはイエス様ご自身の言葉です。けれども聖書全体を通して、神は人が歩むべき道について知恵を与えているということで、引用として語られているのだと思います。

それは何かと言いますと、「罪を告白して、罪を捨てて、神に立ち返ることを拒む」私たちの肉の性質であります。聖書といっても、その時はもちろん旧約聖書のことを指しています。聖書の初めから終わりまで、肉に属する者が、御霊に属する者を迫害した歴史になっています。アダムが罪を犯して、それから生まれたカインが、自分の行ないを、弟アベルのいけにえによって否定されて、それでアベルを殺しました。キリストによる血を流すところの犠牲で罪が赦されるのですが、それを認めたくないで、かえってその罪の赦しを否定するのです。

そして旧約聖書は、キリスト教会ではマラキ書が最後になっていますが、ユダヤ人の聖書は歴代誌が最後になっており、その流血の迫害はザカリヤのところで終わっています。祭司エホヤダ

によって幼い時から主にあって育ったヨアシュが、エホヤダが死ぬと側近が彼を伏し拝みはじめました。それをエホヤダの子ゼカリヤが預言をして、それは良いことなのか？これで主の繁栄を取り逃がすことになるのではないかと警告すると、王は陰謀によって彼を殺しました。しかし、祭壇と聖所の間のところで彼を殺したのです。

聖書は血なまぐさいと思われると思います。そして世界でもエルサレムを中心にして、今も騒動が起こっています。日本人はいかに彼らが宗教的で愚かなことをしているのかと思っていることでしょう。けれども、それは私たち一人一人の、神に反抗する罪を映し出しているのです。

11:52 忌まわしいものだ。律法の専門家たち。あなたがたは、知識のかぎを持ち去り、自分もは
いらず、はいろいろとする人々をも妨げたのです。」

最後の忌まわしさは、「人を神の国に入らせない」というつまずきであります。自分自身も天の御国に入ることができませんが、それだけでなく入ろうとする人々までが神の真理から離れるということがあっていいのか？ということです。私は、このことに対して震えがきます。キリストの福音をそのまま伝えることをせず、他のものを付け足したり除いたりすることによって、入ろうと思っているのに入らせなくしてしまっているのではないか？主は全ての人が救われることを願っておられ、いま御霊によって人々を救おうとしておられるのに、自分の欲を選んで妨げを作ってしまったやいな

11:53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者、パリサイ人たちのイエスに対する激しい敵対と、いろいろのことについてのしつこい質問攻めとが始まった。11:54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと、ひそかに計った。

イエスは、そのパリサイ人の家を出て行かれましたが、そこら辺には他の律法学者やパリサイ人がいました。それで激しく敵対したのです。そしてこれが殺意となり、いつ彼を罪に定め取ら得ることができるかを密かに願いました。次回学びますが、イエス様は彼らの教えを、「パン種」と呼びます。少し受け入ると、それがふくらんで大きくなるという教えだということです。私たちが今、心を探って、その偽りの教えがないかどうか調べていきましょう。